中小規模病院様向けクラウド型電子カルテシステム
「HOPE Smart Cloud Karte」導入事例
医療法人了生会 古梅記念病院　様

# 病院の未来を見据え、紙カルテから電子カルテへ。職員の不安を乗り越え実現した病院DX

和歌山県で地域に密着した医療を提供する医療法人了生会 古梅記念病院（以下、古梅記念病院）では、病院の将来や人材確保、医療DXへの対応を見据え、長年続けてきた紙カルテ運用から電子カルテへ移行しました。導入にあたっては職員の不安や運用変更への懸念もありましたが、教育ポータルやリハーサルを活用した段階的な準備を進めることで円滑な運用定着を実現。HOPE Smart Cloud Karteの活用により、情報共有の向上や業務効率化を実感し、地域医療を支える基盤づくりにつなげています。
本事例では、電子カルテ導入検討の背景、HOPE Smart Cloud Karteを選定した理由、導入成功のポイント、導入後の効果についてご紹介いたします。

## - 電子カルテ導入の背景

### 紙カルテ運用から次の一歩へ<br>病院の将来を見据え、電子カルテ導入を決断

和歌山県で地域に密着した医療を提供する古梅記念病院は、病床数110床を有し、整形外科、外科、内科、脳神経外科、リハビリテーション科、乳腺外科、形成外科など幅広い診療科を備える病院です。一般病床72床、地域包括ケア病床38床を有し、外傷骨折の手術・保存療法、乳がん・下肢静脈瘤の手術、関連施設からの受け入れなど、地域の多様な医療ニーズに応えています。
同院では長年、紙カルテによる運用を続けてきました。しかし、医療DXの流れや2030年までに電子カルテ普及率100%を掲げる国の方針、さらに人材採用面での課題を背景に、電子カルテ化の必要性を強く意識するようになりました。特に、採用面接において「電子カルテが入っていない」ことが理由で応募者に敬遠されたケースもあり、今後の病院運営を考えるうえで、導入は避けて通れないテーマとなっていました。

## - 導入前の不安

### 電子カルテは必要。<br>でも、本当に使いこなせるのか

電子カルテ導入にあたり、古梅記念病院が抱えていた不安は決して小さくありませんでした。現場にはパソコン操作に慣れていない職員もおり、年配の職員からは導入に対する抵抗感もありました。実際に電子カルテの導入を推進された
診療放射線技師・電子カルテ導入担当者の中屋氏は、当時の状況について次のように振り返ります。

**中屋氏：電子カルテの導入が決まった際、年配の職員からの抵抗もあり、不安しかありませんでした。紙カルテからの電子化だったため、導入後の病院運用について想像がつきませんでした。**

一方で、同院では「国の方針がそうなっているので、できるときにやった方がいい」という判断もありました。導入に対する不安はありながらも、病院の将来を見据え、理事長の古梅氏が先頭に立って電子カルテ導入を進める方針を示したことが、院内の意識を高める重要なきっかけとなりました。

## - HOPE Smart Cloud Karteを選んだ背景

### 将来性のあるメーカーで、<br>安心して使える電子カルテを

古梅記念病院では、過去に複数メーカーの電子カルテを比較・検討してきました。その中で富士通Japanの電子カルテを中心に検討が進み、販売店から新製品である「HOPE Smart Cloud Karte」の紹介を受けました。検討を重ねた結果、最終的には理事長の判断により、HOPE Smart Cloud Karteの導入を決定しました。同院が電子カルテ選定で重視していたのは、単に価格の安さではなく、将来にわたって安心して利用できる信頼性や実績でした。

**古梅氏：地域の中小規模病院であっても、患者に信頼される医療を提供するために、最先端かつ高性能な医療機器やシステムを積極的に導入すべきだという考えがありました。当院では以前から、信頼できるメーカーの高付加価値な製品を選定することを重視しており、その観点から、豊富な導入実績やセキュリティ面への安心感を評価し、導入を決定しました。**


© 2026 Fujitsu Limited

特に、古梅記念病院では、電子化に伴うセキュリティへの懸念も大きく、弊社のセキュリティ対策を信頼いただき、HOPE Smart Cloud Karteを選定いただきました。

## - 導入を成功に近づけるポイント①

### 導入推進メンバーが準備に<br>集中できる体制を整えること

電子カルテ導入を進めるうえで重要なポイントについて、中屋氏は次のように語ります。
**中屋氏：導入を推進するコアメンバーは、看護部門・コメディカル部門・事務部門から最低3名は必要だと思います。また、もし今後もう一度電子カルテ導入を行うのであれば、推進メンバーが導入準備に十分な時間を確保できる体制を整えたいですね。その方が、よりスムーズに導入を進められると思います。**

古梅記念病院では、中屋氏を中心に、看護・コメディカル・事務の各部門から導入推進担当者を選出し、プロジェクトを進めました。推進担当者の選定にあたっては、理事長から「電子カルテの利用経験がある職員を中心に選定したい」という方針が示され、それをもとに体制を構築しました。
一方で、看護部門およびコメディカル部門の担当者は通常業務との兼任となり、専任で対応していた中屋氏へ負荷が集中する場面もありました。特に初めての電子カルテ導入では、稼働後の運用イメージを十分に持てないまま、設定や運用設計を進める必要があります。「何を準備しなければならないのか」「実際の業務がどのように変わるのか」が見えにくいこと自体が大きなハードルだったと振り返ります。

だからこそ、電子カルテ導入を成功させるためには、コアメンバーが導入準備に専念できる環境を整えることが重要です。また、部門ごとの担当者が同じ情報を共有しながら進めることで、院内全体への展開もスムーズになります。
さらに古梅記念病院では、電子カルテ導入を一部の担当者だけの取り組みにしないことも重視しました。キックオフでは理事長自らが「電子カルテを導入する」という方針を職員へ明確に発信。こうした経営層からのメッセージが、院内全体の意識醸成につながり、導入プロジェクトを前進させる大きな原動力となりました。

## - 導入を成功に近づけるポイント②

### 操作学習ツールやミニリハーサルを活用し、<br>段階的に習熟度を高める

導入プロジェクトでは、電子カルテの操作を自己学習できるHOPE Smart Cloud Karteの独自ツール「教育ポータル」（図1）が活用されました。

古梅記念病院では、「教育ポータル」を活用することで、電子カルテの運用や操作方法への理解を深めることができたと評価しています。特に、導入プロジェクトを担うコアメンバーが知識を習得し、運用イメージを具体化するうえで役立つ仕組みだったと振り返っています。SEが教育ポータルの内容を印刷して渡し、看護側でも印刷資料を見ながら学習するなど、院内での習得にも活用されました。
また、同院では運用イメージを具体化するため、ミニリハーサルを実施しました。マスタ登録の最終的な仕上がりが見えない中で手探りの作業が続くなか、ミニリハーサルを行ったことで、医師を含めた職員の習熟度向上に有効だったとされています。導入時点で完璧を目指すのではなく、稼働に向けて段階的に触れ、理解し、改善していくことが重要なポイントとなりました。

図1：HOPE Smart Cloud Karteの独自ツール「教育ポータル」




## - 稼働後の効果

### カルテを探す・運ぶ時間がなくなり、<br>情報共有がスムーズに

システム導入後、古梅記念病院では日常業務の流れに変化が生まれました。紙カルテ運用時には、カルテを探す、運ぶ、確認するといった作業が発生していましたが、現在は必要な情報を院内のどこからでも確認できるようになっています。

看護部門では、医師のオーダーをタイムリーに確認できるようになり、従来のように紙を移動させる必要がなくなりました。コメディカル部門においても指示内容を迅速に把握できるようになったことで、業務の待ち時間削減やミス防止につながっています。


© 2026 Fujitsu Limited

医事課においても、従来は紙カルテを確認しながら手入力していた作業が、カルテ情報の抽出・確認を中心とした運用へと変わり、工数削減を実現しています。
このように、これまで情報の受け渡しや確認に費やしていた時間が削減されたことで、職員は患者対応やケアにより多くの時間を充てられるようになりました。業務効率化にとどまらず、患者サービスの向上にもつながる環境が整いつつあります。

## - 稼働後の職員の反応

### 導入前は不安、<br>導入後は「入ってしまえば批判的な人は少ない」

電子カルテ導入前には、業務フローの変化や操作面への不安から、導入に抵抗感を持つ職員もいました。しかし、実際に稼働してみると、「入ってしまえば、批判的な人は少ない」と中屋氏は振り返ります。一方で、操作手順の複雑さや、多機能であるがゆえに使いこなすまでに時間を要するといった声もあります。そのため、電子カルテは導入すること自体がゴールではなく、現場に合わせて運用を最適化しながら、どこまで業務を標準化し、どこで運用との折り合いをつけるかが重要になります。
古梅記念病院では、電子カルテ導入後も現場の声を取り入れながら継続的な運用改善に取り組んでいます。システムと現場が歩み寄りながら運用を磨き上げることで、より効率的で質の高い病院運営の実現を目指されています。

## - 経営面への効果

### 人材確保と将来の病院運営を見据えて

古梅記念病院では、電子カルテ化を単なる業務効率化のためだけでなく、今後の病院が生き残るための基盤として捉えています。特に、若い人材の確保においては重要な要素の一つであり、採用面でのアピールにもつながると考えられています。
実際に、「電子カルテが導入されていない」ことを理由に採用を見送られたケースもありました。今後は、デジタル化された診療環境を病院の魅力として発信し、より多くの人材に関心を持ってもらえる病院を目指しています。

## - これから電子カルテを検討する病院様へ

### 不安はあっても、準備次第で乗り越えられる

これから電子カルテ導入を検討する病院に向けて、理事長の古梅氏は、次のように語ります。

**古梅氏：病院の将来を考えると、電子カルテは遅かれ早かれ導入しなければならないものだと思います。それであれば、できるだけ早い段階で導入した方がよいのではないでしょうか。補助金を待つことも一つの考え方ではありますが、待つことで自院の計画がずれてしまう可能性もあります。出遅れないよう早めに検討を始めることが大切だと思います。**

さらに、電子カルテ導入を推進した中屋氏は、成功のポイントについて次のように語ります。
**中屋氏：電子カルテの導入は、最初の設計が非常に重要です。導入前の段階で運用をしっかり検討し、中心となるコアメンバーを決め、業務を分担できる体制を整えておくことが大切です。初めての導入で不安はあると思いますが、しっかり準備を行えば必ず乗り越えられると思います。**

電子カルテ未導入の病院にとって、導入前の不安は決して小さくありません。しかし、古梅記念病院の取り組みは、紙カルテ運用からの移行であっても、院内体制の整備と段階的な準備により、円滑な導入を実現できることを示しています。
病院経営を取り巻く環境が変化するなか、こうしたシステムは単なる業務効率化のためのシステムではなく、将来の病院運営を支える重要な基盤の一つです。HOPE Smart Cloud Karteは、その第一歩を支える選択肢として、中小規模病院のデジタル化をサポートしています。


© 2026 Fujitsu Limited





## “ 電子カルテは、病院の将来を支える基盤 ”

電子カルテは、単なる業務効率化のためのシステムではなく、
人材確保や医療DXへの対応など、病院の将来を支える重要な基盤で
あると感じています。

医療法人了生会　古梅記念病院　理事長　古梅 弘氏
医療法人了生会　古梅記念病院　診療放射線技師・
電子カルテ導入担当者　中屋 雅喜氏

### ■ お客様情報

お 客 様 名　：　**医療法人了生会 古梅記念病院**
所 在 地　：　和歌山市新生町5番37号
標 榜 科 目　：　整形外科・脳神経外科・外科・乳腺外科
形成外科・内科・リハビリテーション科
病 床 数　：　110床（一般72床 、地域包括ケア病床38床）
Ｕ Ｒ Ｌ　：　https://kobaikinenhp.sakura.ne.jp/index.html



古梅記念病院は、地域に密着した医療機関として、多様な患者のニーズに応える医療を提供しています。
地域医療を支える病院として、より質の高い医療サービスの提供に取り組まれています。

**富士通Japan株式会社**

〒212-0014
神奈川県川崎市幸区大宮町1-5 JR川崎タワー
https://www.fujitsu.com/jp/fjj/
お客様総合センター 0120-835-554
ご利用時間：9時～17時30分
（土曜日・日曜日・祝日・当社指定の休業日を除く）

**Webでのお問い合わせ・資料ご請求など**

お問い合わせ

当社はセキュリティ保護の観点からSSL技術を使用しております。


© 2026 Fujitsu Limited